

九〇年の初頭に

吃音者を取りまく状況について、常に問題になるのは、吃音者の社会的な位置の問題である。確かに吃音者は他の障害者に比べて教育の場や職場から直接的に排除されていない。だが、逆にそのことをもって吃音者に対する差別がとらえにくくなっている。そこで吃音者は努力をすれば社会に受け入れられる、気持ちの持ちかたを変えれば社会に受け入れられる、ということがあいま変わらず手を代え品を代え繰り返し出てくる。

それは女性差別の問題から演繹すると、問題ははっきりする。例えば、イギリスの首相と王は女性である、だからイギリスには女性差別がないと言いきらるだろうか。女性も相対的に差別されていて、男性と女性は非対称的である。吃音者の場合も吃音者でも「一国の首相」になった人がいる、とされる。そしてあらゆるところで活躍している吃音者がいるということが強調される。だが、そのことをもってどうして差別がない、と言いきらるだろうか。

吃音者が他の障害者に接した時、繰り返し出てくるのは「私達より不幸な人達」ということである。けれども障害者の明るさに触れる時、戸惑いを示す。吃音者を自ら「健常者と障害者の掛け橋」と規定する人さえいる。自らをマージナルマン（境界人）とするのである。その論理に乗れば吃音者の不幸は「マージナルマンの不幸」である。

「マージナルマン」については南アフリカのカラード（差別的なニュアンスがあるが一般的に「混血」と訳される）と呼ばれる人達のことと明確に問題点を指摘できる。

黒人はアパルトヘイト下で、少なくとも黒人解放闘争を初めてからは（そして、少なくともその闘いを進める人達は）、自らの文化ということも含め明確な帰属意識を抱き生き生きと生きている。それに反しカラードは、自らの依拠するところを白人の文化におく（おこうとする）傾向が強く、自らが何者であるのかという帰属意識が曖昧になり、暗い顔をして生きている傾向が強い、しかもそれは白人としてパス（通過）できる可能性が強いほどその傾向が強くなると言われる（H・デッキー・クラーク『差別社会の前衛』）。

断っておくがマージナルマンという人達が実体として存在するわけではない。カラードは白人としては規定されない、法的文化的社会的に明らかに差別される側に属する。差別に中間項など存在しない。価値両義的とか、異化しない場合があるにせよ、又差別するものが他の項で差別するという重層構造はあっても、それは中間項などではない。この場合白人—非白人という異化の構造があるだけであり、非白人の中で又異化がおきるにせよ、白人—非白人の間に中間項はない。けれどもマージナルマンは非白人でありながら、白人の価値観にとらわれる。そこにおいて心理的マージナリティにおちいる。その人達をマージナルマンと規定するだけである。

吃音者差別の性格において、他の障害者と比較すれば、絶対的に排除される傾向よりも相対的排除の性格が強い。そして相対的排除が差別としてとらえられにくいということ

で、吃音者に対する差別が分かりにくくなっている。

さらに、そういう現状に加え、新しい状況の変化をもって楽観視している人もいる。

今日、機械化と分業がますます進行している、その中で、例えば話すということさえさほど必要としない仕事も増えているとはいえる。しかしその内実を見ると、精神労働とされていた事務労働が単純労働化していて、そのヒエラルヒーの下位に組み込まれているということではないか。そしてその上位の仕事はチームワークとか人事管理とかプランニングとかのコミュニケーションをより必要にする仕事である、とされて来ているのであって、そういう意味でその分業のヒエラルヒーのなかで相対的に下位におかれるという形では、同じ社会の枠組み下では、(機械化にともなう)分業の進展は差別を拡大させるではないか、と考えられる。

いずれにしても、吃音者が日々傷ついている状況一被差別の状況は確固としてあるし、それが自然消滅するという幻想を抱くことはできない。

吃音者の運動は吃音を治すということから始まった。その運動は言友会の「吃音者宣言」をもって大きな結節点をくぐった。しかし、そのときからまるで時が止まったようになっていくという批判があるし、Uターンをしていると感じることさえある。

「吃音者宣言」は非論理的ではあったが、そのなかに孕まれていたいろいろな可能性の芽が生まれ、結局個々人の気持ちを切り替えることを中心にした「運動」になってしまっている。

個人的に努力して「治す」から個人的に気持ちの持ちかたを変える、ということに変わっただけで、結局、吃音者問題は吃音者個人の問題一責任へ収約される。そこには負性がつきまといざるをえない。吃音者の問題を吃音者総体の問題として、(被差別の)関係性の中でとらえる観点を欠落してしまっている。

「吃音者宣言」は結局開き直ろうとしたけれど開き直れなかった「宣言」ではないだろうか。それは「吃音者宣言」を被差別という明確な観点をもった「障害者宣言」としてなしえなかったということにあるのではないだろうか。

以上のことを踏まえるならば、吃音者運動の方向は次のように示しえる。

一つは、吃音者運動の始まりは自らが吃音者であることを表明することから始まる。したがってその会の名称においてもそのことを明らかにしなければならない。我(々)は吃音者解放研究会ということでしめた。将来、それを軸にして吃音者協会、言語障害者協会という広がりを持った集まりを形成したい。

二つめは、吃音者の集まりを障害者団体として内外の規定を勝ち取ること。それは現実の運動の積み重ねの結果として引き出しえることではあるが、もう一つの軸として政府、地方自治体との交渉を置かねばならない。三つめは、障害者の立場にたつて、他の障害者との共に歩む障害者運動を作り出すこと。

四つめは、マスコミなどの差別的言辞行動に対する糾弾、就職、首切り、職場における

差別に対する撤回を要求する糾弾運動。

五つめは、教育において、教師の無理解などにより、吃音児が日々傷付けられている現実をおさえ、啓蒙運動、糾弾行動を行うこと。具体的には、吃音者の体験を元にした具体的な対応をも含んだパンフレットを作成し、研究相談機関、ことばの教室を軸に働きかけをおこなわねばならない。

六つめは、子供にとって両親の存在は大きい、最初の傷付きは両親からもたらされることが多い。親への働きかけも同じようになさねばならない。

七つめは、今日差別は重層化し、分断の罫に陥ってしまう傾向がある、他の障害者との連帯はもとより、障害者差別以外の差別を対象化し、反差別の共同運動を作りあげなければならぬ。

八つめは、これらのために、理論化をかちとらねばならない。それは吃音—吃音者とは？という問い掛けにも及び、又、差別の根源的とらえ返しも含まねばならない。

以上の方針は長期方針ということで、今我々は実践的には「全くの白紙」としか言いようがない状況であり、とりあえずは仲間探し、仲間づくりからしか始まらず、理論化の作業の中で吃音者解放研究会を発足することを最大の目標としなければならない。そのことなかで、できることから一步一步積み重ねていくしかない。

今まで、「吃音者の解放」が語られたことはある。だが、その「解放」のイメージは曖昧だった。「吃音者の解放」とは差別からの解放で、他の一切の意味はこめられていない。

吃音者解放運動は吃音者解放研究会（の流れ）を定立しえることによって、やっとその出発点に立つことができる。そのことだけは宣言しうらと思う。